

## 「二つの国の物語」を読む

～地は貧しい——希望がひらかれるとき～

森 一彦

つい先日 2010 年 10 月 6 日、株式会社理論社が民事再生法の適用を申請とのニュースが流れた。理論社は、児童文学の草分け的な出版社である。創業者の小宮山量平氏は、同社の経営から退かれて久しく、94 歳となる現在は上田市にあるエディターズミュージアム(小宮山量平の編集室)を主宰されている。同氏が軍隊生活を終えて理論社を創業したのは、敗戦から 2 年後の 1947 年 6 月であった。その思いは、詩人ノヴァーリスの詩をかかげたことに表れている。

同胞(とも)よ 地は貧しい  
我らは 豊かな種子(たね)を  
蒔かなければならない

「この詩は、戦争によって深い傷をおった日本人のところに、新しい希望が芽生えることへの願い」であり、「その願いは、とりわけ子どもたちに向けられるものでした」と、理論社のホームページにはある。理論社はこの理念のもとに良書を出し若い作家を育て続けた。小学生のときに私が読んだ大石真「チョコレート戦争」は今も読み継がれている。それから私は、理論社の本をむさぼるようにして読んだ。神沢利子「ちびっこカムの冒険」、乙骨淑子「乙骨淑子の本」(日中戦争を描いた「ぴいちゃあしゃん」他の全集)、灰谷健次郎「太陽の子」、今江祥智「優しさごっこ」、新村徹「魯迅のころ」、下嶋哲朗「ヨーンの道」、倉本聡「わが青春のとき」……。

理論社の倒産後、毎日新聞に出版<冬の時代>を語る小宮山氏のインタビューが掲載された。「日本の出版界はベストセラー屋さんばかり……あー、情けない。いやしくも編集者なら、本当の作品とは何か、読むべきものとは何かを考えないと……」と、出版界への苦言を呈した後、尖閣問題でぎくしゃくする日中問題とナショナリズムの台頭に対して、こう語っている。「ぞっとする。僕たちは視野狭窄に陥ってはいけない。流されてはいけない。20 世紀はせつちな時代でした。革命と戦争の時代でした。21 世紀は漸進の時代です。再び祖国の喪失があってはいけない。まだ地は貧しい。いまこそ良書が必要です」(毎日新聞 2010 年 10 月 28 日東京朝刊、「毎日 jp 小宮山量平」でネット検索)

ここに紹介する赤木由子の「二つの国の物語」も、理論社が生み出した児童文学作品である。1966 年(著者 36 歳)に「柳のわたとぶ国」として初版が出され、1980 年に「二つの国の物語①—柳のわたとぶ国」、1981 年に続編の「二つの国の物語②—嵐ふきすさぶ国」と「二つの国の物語③—青い眼と青い海と」を出版、「二つの国の物語」三部作となった。

1995年には、理論社の戦後50年特別企画として、三部作を一冊にまとめた「二つの国の物語」《全1冊》が発行されている（余談になるが、この全1冊は、二段組みの小さな文字に広辞苑の半分はあろうかという厚さと重さ、およそ子供が読める代物ではない！）。



「二つの国の物語」は、1935年（昭和10年）のシーンから始まる。両親を亡くした小学1年生の「ヨリ子」は、山形の実家の貧しい村から、満洲の寧安で写真館を営む兄三郎と愛子夫婦の元にもらわれて海を渡る。写真館は、竜宮城のように豪華な建物だった。三郎は優しく、愛子は天女のように素敵な女性だった。隣家の満人家庭の子ホウラン、その友人のミンホイたちと、ヨリ子はすぐに仲良くなり、町中を駆け回る。ケシの花を栽培してアヘンをつくり軍資金にしてい

たのは日本軍で、ケシの花畑をつぶそうとしていたのは、匪賊と呼ばれる人々だった。ホウランの兄で、抗日運動に身を投じる路英とヨリ子との運命的な出会い、肺病となり鞍山の病院へ行ってしまふ愛子、そして抗日運動家の妹だという理由により殺されるホウランの死……。第一部「柳のわたとぶ国」では、植民地時代を生きた日本人の群像と、満洲の実像とを描き出す。

小学校を総代として卒業したヨリ子は、保証人となって破産した兄三郎とともに、愛子のいる鞍山へと引っ越す。鞍山は、中国人から<エンマ殿>と呼ばれていた昭和製鋼所の街だった。愛子は「アカ」の嫌疑で憲兵隊に捕まり、拷問を受けていた。第二部「嵐ふきすさぶ国」では、支配が崩壊するなかでの忍び寄る暗い影、そこに翻弄される人間の条件を克明に描く。朝鮮人にとっての満州とは、モンゴル人から見たノモンハン戦争とは……。歴史を俯瞰しつつそれを個別の人間の物語として息吹を与えリアルに描き出す。

昭和20年8月15日、敗戦の日、灯火管制が解かれた鞍山の夜は、久しぶりに平穏と明るさを取り戻し、ヨリ子は読書に没頭していた。ソ連軍が攻め込むなか、芸者風の日本人の女たちが身代わりとなり助けられるヨリ子。中国人と朝鮮人も日本人を襲い始める。国府軍と八路軍との激しい市街戦、忍び寄る極寒の冬、何者かに殺され街にころがる日本人憲兵の胴体、路英とヨリ子との抱擁と別れ……。第三部「青い眼と青い海と」では、国家に見捨てられた人々と敗残者たちの生きざまから、中国人と日本人の多くの死者を乗り越えての祖国への出航、そして帰還船から祖国日本が見えてくるまでを描いている。

最終章、帰還船のなかで生まれた、青い眼の赤ちゃん。ソ連兵にやられたことを激しく非難する人々、ヨリ子は船内演芸会で立ち上がり、涙ながらに訴える。何故、苦勞をとものにここまで引き上げてきた人のことを悪く言うのかと。次から次へとふきあがる思いを、ヨリ子は訴える。船内の人々は、絶望のなかで生まれた新しい生命を、祝福することができるのだろうか……。

「二つの国の物語」は、そのほとんどが著者、赤木由子の実体験に基づいていると思われる。子供を連れて引き揚げた著者の日本での生活は、上野の地下道で浮浪者の子どもた

ちとともに始まった。本家の裏切りと兄の死、貧困、本を読むことも小説を書くことも許さない夫との確執、闘病、火災による子どもの焼死、原稿の焼失……。著者と家族たちは、そんな絶望のなかで、《その原因にたいして体当たりしないかぎり、希望は生じないことを自覚するように》なる。そうして生まれたのが、本書であった。「二つの国の物語」は、著者赤木由子にとって、まさに絶望の果ての帰還船のなかで生まれた新しい生命そのものであった。本書は、物語としても、その存在としても、希望がひらかれるときを描ききっているのである。

最後に、1980年に出版された「二つの国の物語①一柳のわたとぶ国」の最終頁に小宮山量平氏が寄せた言葉から、抜粋してここに紹介したい。

『……たしかに、日本と中国との間に平和な交流は始まり、両国の関係は日まじに親密となりつつあります。けれども、お互いがお互いを「必要とする」がための親密さだけではなく、ほんとうに信じあい愛しあう国民同士として心と心が結びあうためには、今こそ、瞳を大きく開いて、あの戦争下の苦しみをこそかえりみるべきでしょう。人間同士として傷つけあい、しかも人間同士として熱く信じあい愛しあった歴史の日々を、赤木さんは、日本の若い世代にこそ送りとどけたいと、献身したのです。……』

私は、小さな活動を続ける方正友好交流の会の存在意義も、まさにここにあると考えている。現在の中国と日本の姿を見たら、「ヨリ子」は何と言うのだろうか。

(もり・かずひこ、1958年生まれ。93年から百貨店の駐在員として北京に3年半滞在する。現在、広告会社に勤務。ここ数年、方正友好交流の会総会では司会を務めている。趣味はカラオケ、ヨガなど)